７　次の文章は、『蜻蛉日記』中巻の一節である。作者の夫、兼家の来訪は途絶えがちになっている。これを読んで、後の問に答えよ。

〈名古屋大〉二〇二一年度出題

　かくて四月になりぬ。十日よりしも、また五月十日ばかりまで、「いとあやしく悩ましき心地になむある」とて、例のやうにもあらで、七八日のほどにて、「ア念じてなむ。おぼつかなさに」など言ひて、「夜のほどにてもあれば。かく苦しうてなむ。内裏へも参らねば、イかくありきけりと見えむも便なかるべし」とて、帰りなどせし人、おこたりてと聞くに、待つほど過ぐる心地す。あやしと、人知れず今宵をこころみむと思ふほどに、はては消息だになくて久しくなりぬ。めづらかにあやしと思へど、るに、夜は世界の車の声に胸うちつぶれつつ、時々は寝入りて、明けにけるはと思ふにぞ、ましてあさましき。幼き人通ひつつ聞けど、さるはなでふこともなかなり。「いかにぞ」とだに問ひ触れざなり。まして、これよりは、なにせむにかは、あやしともものせむと思ひつつ、暮らし明かして、格子など上ぐるに、見出だしたれば、夜、雨の降りける気色にて、木ども露かかりたり。見るままにおぼゆるやう、

（Ａ）夜のうちはまつにも露はかかりけり明くれば消ゆるものをこそ思へ

　かくて経るほどに、その月のつごもりに、「小野の宮のかくれ給ひぬ」とて世は騒ぐ。ありありて、「世の中いと騒がしかなれば、つつしむとて、えものせぬなり。になりぬるを、これら、とくして」とはあるものか。いとあさましければ、「このごろ、ものする者ども里にてなむ」とて返しつ。ウこれにまして心やましきさまにて、たえて言づてもなし。さながら六月になりぬ。かくて数ふれば、夜見ぬことは三十余日、昼見ぬことは四十余日になりにけり。いとにはかにあやしと言へばおろかなり。心もゆかぬ世とは言ひながら、まだいとかかる目は見ざりつれば、見る人々もあやしうめづらかなりと思ひたり。ものしおぼえねば、ながめのみぞせらるる。人目もいと恥づかしうおぼえて、落つる涙おしかへしつつ、臥して聞けば、鶯ぞ折はへて鳴くにつけて、おぼゆるやう、

（Ｂ）鶯ももなきものや思ふらむみなつきはてぬ音をぞなくなる

【注】　○帰りなどせし人―─兼家をさす。

○幼き人通ひつつ─―「幼き人」は、作者と兼家の子、道綱をさす。父兼家のもとに通っている。

○小野の宮の大臣―─藤原実頼。兼家の伯父。

○服─―喪に服すこと。伯父の場合は三ヶ月。

○これら、とくして―─これらの衣服を早く仕立ててくれ、の意。

○ものする者ども─―侍女たち。後の「見る人々」も同じ。

○折はへて─―時節を長引かせて。

○期もなき─―終わりのない。

問１　傍線部ア～ウを、適宜語句を補い、わかりやすく現代語訳せよ。

問２　波線部「つれなしを～ましてあさましき」からうかがわれる、作者の心情について説明せよ。

◎問３　和歌（Ａ）および（Ｂ）を、掛詞や比喩に注意してわかりやすく現代語訳せよ。

【解答と採点基準】

問１　ア＝Ａ私は体調がすぐれないのを我慢して Ｂあなたのもとへ来た。Ｃあなたのことが気がかりなために

Ａ＝４〔「体調がすぐれないのを」などの補いを欠くものは減点３。〕

Ｂ＝３〔「あなたのもとへ」、「来た」という二点が必要。〕

Ｃ＝３〔「あなたのことが」などの補いを欠くものは減点２。〕

　　　イ＝Ａこうして女のもとに出歩いていたと Ｂ人から思われるようなことも Ｃ不都合だろう

Ａ＝５〔「女のもとに」は「あなたのもとに」なども可。これらの補いを欠くものは減点３。「ありく」、過去「けり」の誤訳は減点２。〕

Ｂ＝２〔「見ゆ」、仮定・婉曲「む」の明らかな誤訳は０。「人から」などの補いはなくても許容。〕

Ｃ＝３〔「便なし」の誤訳は０。推量「べし」の誤訳は減点２。〕

　　　ウ＝Ａ私が喪服の仕立てを断ったために、Ｂ兼家はいっそう不機嫌な様子で、Ｃまったく伝言もない

Ａ＝４〔「衣服（喪服）の仕立てを断った」という内容が必要。〕

Ｂ＝３〔「心やまし」の誤訳は０。「まして」の誤訳、「兼家・夫」という主体の明示なしはそれぞれ減点２。〕

Ｃ＝３〔「たえて」、「言づて」の誤訳はそれぞれ減点２。〕

問２　Ａ来訪もせず手紙さえ寄こさない兼家への不満を抑え、平静を装いつつも、Ｂ夜は牛車の音に、兼家の来訪かと期待して気をもみ、そうしてその期待がはずれ落胆することを繰り返し、Ｃ兼家は来ないのだと諦めて寝入るものの、Ｄ結局、本当に兼家が来ないまま夜が明けてしまったことに一層あきれはて情けなく思うという心情。

Ａ＝２〔「平静を装う」「平気なふりをする」などの内容を欠くものは０。「兼家の来訪や手紙がない」という内容を全く欠くものは減点１。「不満」などの心情はなくても許容。〕

Ｂ＝３〔「期待」「気をもむ」「心が乱れる」「胸をどきどきさせる」などの心情を欠くものは０。「牛車の音」に言及しないものは減点２。〕

Ｃ＝２〔「兼家の訪れを諦めて寝入る」は、別解として「熟睡できない」という内容でもよい。〕

Ｄ＝３〔「あきれる」「情けない」という心情を欠くものは０。「兼家の訪れがないまま夜が明けた」という内容を欠くものは減点２。〕

問３　（Ａ）＝Ａ夜のうちには、松にも露がかかったように、あの人の訪れを待つ私の袖にも涙がかかったことよ。Ｂ夜が明けると、露は消えるように、わが身も消え入るほどの物思いをすることよ。

Ａ＝５〔「松」と「待つ」の掛詞が訳出できていないものは減点２。「露」が、作者の涙の比喩であることを訳出していないものは減点２。詠嘆の「けり」を訳出できていないものは減点１。〕

Ｂ＝５〔「露が消える」と「わが身が消え入る」の両方の意味を訳出していないものは減点４。「わが身が消え入る」は「私が消え入る」「私が死ぬ」などの表現も可。「ものをこそ思へ」の誤訳は減点２。〕

　　　（Ｂ）＝Ａ鶯も私のように、終わりのない物思いをしているのだろうか。Ｂ六月になっても鶯は尽きることなく鳴いているようだが、私も尽きることなく声を上げて泣いている。

【現代語訳】

　こうして四月になった。（四月）十日から、また五月十日ごろまで、（兼家は）「たいそう妙なほどすぐれない気分であるよ」と言って、いつものようでもなくて（＝普段はまだましだが、今回はさらにひどくて）、七、八日（に一度）ほど（の訪れ）であって、（兼家は）「問１ア（私は体調がすぐれないのを）我慢して（あなたのもとへ来た）。（あなたのことが）気がかりなために」などと言って、「夜分でもあるので（人目に付かないだろうと、こっそりやって来た）。（しかし）こう気分が悪くて（はどうしようもない）。内裏へも参上していないので、問１イこうして（女のもとに）出歩いていたと（人から）思われるようなことも不都合だろう」と言って、帰った人（＝兼家）は、病気が治って（いまはよくなっている）と聞くが、待つ頃が過ぎる心地がする（＝来るだろうと思う頃を過ぎても兼家はやって来ない）。（私は）妙なことだと思い、人知れず今夜は来るか様子を見ようと思ううちに、ついに手紙さえなくなって久しくなった。めったになく妙なことと思いながらも、平気なふりを装いつづけているが、夜はあたりの牛車の音に気をもんでは、（兼家は来そうにもないので）時々は寝入って、（結局、兼家が来ないまま）夜が明けてしまったことよと思うにつけて、いっそうあきれはてる。幼い道綱が（兼家のところに）行くたびに（兼家の様子はどうかと）聞くが、そのくせなんということも（＝格別変わったことも）ないそうだ。（兼家は）「（私が）どう（しているか）」とさえ尋ねないそうだ。まして、こちらからは、どうして、（あの人に）「妙なこと」などと言おうか、いや言うまい、と思いながら、夜を明かし日を暮らして（毎日を過ごしている、ある日の朝）、格子などを上げるときに、外を見やったところ、夜に、雨が降った様子で、木々に露がかかっている。見るままに思い浮かぶことには、

　問３（Ａ）夜のうちには、松にも露がかかったように、あの人の訪れを待つ私の袖にも涙がかかったことよ。夜が明けると、露は消えるように、わが身も消え入るほどの物思いをすることよ。

　こうして時が経つうちに、その月（＝五月）の末に、「小野の宮の大臣が亡くなりなさった」ということで世間は騒然とする。（兼家から長く音沙汰がなかったが）そのあげくに、（兼家から）「世間はたいそう騒然としているようなので、身を慎むということで、（あなたのもとへ）行けないのである。喪に服すことになったので、これら（＝衣服）を、早く仕立てて（くれ）」と言ってよこすことがあろうか（なんと、そのように言って来たのである）。たいそう驚きあきれたので、「このところ、仕立ててくれるような侍女たちは里に帰っていて（こちらにはいない）」と返事をした。問１ウ（兼家は）このためにいっそう不機嫌な様子で、まったく伝言もない。そのまま六月になった。こうして数えると、夜に会わないことは三十余日、昼に会わないことは四十余日になってしまった。たいそう急に（変わってしまった）妙なことだと言っても言い尽くせない。思うようにいかない男女の仲とは言うものの、いまだまったくこのような目には遭ったことはなかったので、（私を）見る侍女たちも妙で珍しいことだと思っている。何も考えられないので、物思いばかりしてしまう。人目もたいそう恥ずかしく思われて、こぼれる涙を押さえながら、横になって聞くと、鶯が時節を長引かせて鳴くのにつけて、思い浮かぶことには、

　問３（Ｂ）鶯も私のように、終わりのない物思いをしているのだろうか。六月になっても鶯は尽きることなく鳴いているようだが、私も尽きることなく声を上げて泣いている。